藤原京右京八条二・三坊の調査

―第185-7次

1　はじめに

本調査は、住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、本薬師寺が占地する藤原京右京八条三坊の東辺にあたり、本薬師寺関連遺構や、西二坊大路および八条条間路などの条坊関連遺構の検出が期待された。

また、本薬師寺では、1992-1次調査の中門、1993-1次調査の中門南側および1994-2次調査の中門北側の各調査において、本薬師寺造営時の整地土下層で、先行西三坊坊間路が検出されている（『藤原概報 24』・『同 26』）。『日本書紀』によると、本薬師寺の造営は天武天皇９年（680）に開始されたとみえ、この頃には藤原京の造営がかなり進んでいたとみなされるため、これらの調査成果は、藤原京の造営過程に関する重要な成果とされている。

そこで、本薬師寺に隣接する本調査地においても、西二坊大路および八条条間路の下層に、先行する条坊遺構が同様に存在するか否かが、課題となった。

調査では、各条坊関連遺構の推定位置にあわせて、敷地の東側に東西３ｍ、南北17ｍの調査区（東区）を、西側に東西５ｍ、南北５ｍの調査区（西区）をそれぞれ設定した。また、東区では調査区中央付近と南端に拡張区を設けた。調査面積はのべ81㎡。調査期間は2015年10月13日から11月20日である。

2　調査成果

基本層序　本調査区の基本層序は、現代の造成土（厚さ0.5m）、耕作土・床土（厚さ0.5m）、褐灰色粘質土（平安時代包含層・厚さ0.2m）、灰褐色粘質土（平安時代の遺構面・厚さ0.2m）、暗褐色粘質土（藤原京造営期の整地土・厚さ0.2m）、地山である。藤原京造営期の整地土下層には、地山の他に厚さ0.2mほどの褐色粘質土・黒褐色粘質土・褐灰色粘質土などが部分的に確認でき、７世紀後半の整地土とみられる。

灰褐色粘質土の上面で平安時代後半から末頃までの溝３条と土坑１基を検出した。暗褐色粘質土の上面で藤原京期の遺構、藤原京造営期の整地土下層および地山の上面で７世紀後半の遺構をそれぞれ検出した。

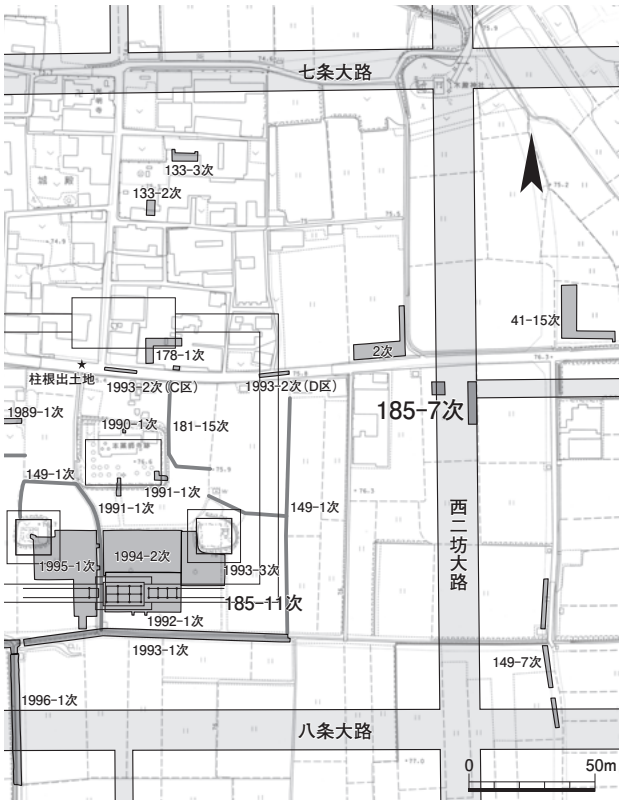

図86　第185-7次調査区位置図　1：3000

藤原京期の遺構

西二坊大路SF5300　東区で東側溝SD480を、西区で西側溝SD485を検出した。調査区の都合上、同一のX座標軸で心々間距離を測ることはできないが、SD480の北端とSD485の南端の側溝心をY座標で比較すれば、その幅は16.9mである。西側溝東肩と東側溝西肩の一部は後世の溝で壊されており、路面幅は同様に参考値となるが、西区南端の西側溝東肩と東区中央付近の完存する東側溝西肩とで15.6mを測る。また、SF5300の造営にあたっては、厚さおよそ0.1～0.2mの暗褐色粘質土によって整地していることを確認した。

東側溝SD480は、東区東側で検出した。東肩は調査区外だが、東区南端を一部拡張し、検出した。幅1.2m、深さは0.3～0.5mを測る。調査区中央やや北で八条条間路南側溝SD481と逆L字状に接続する。北半部の西肩は後世の耕作溝により壊される。底面の標高は南端で74.8m、北端の逆L字状に屈曲する直前箇所で74.7mであり、南から北へ排水したとみられる。

西側溝SD485は、西区で検出した。東肩は平安時代の南北溝により壊されている。遺存する幅は1.4～1.5m、深さは0.8mである。底面の標高は南端で74.5m、北端で74.4mを測り、南から北へ排水したことがわかる。西側溝は東側溝に比べ、その幅、深さともに上回る。

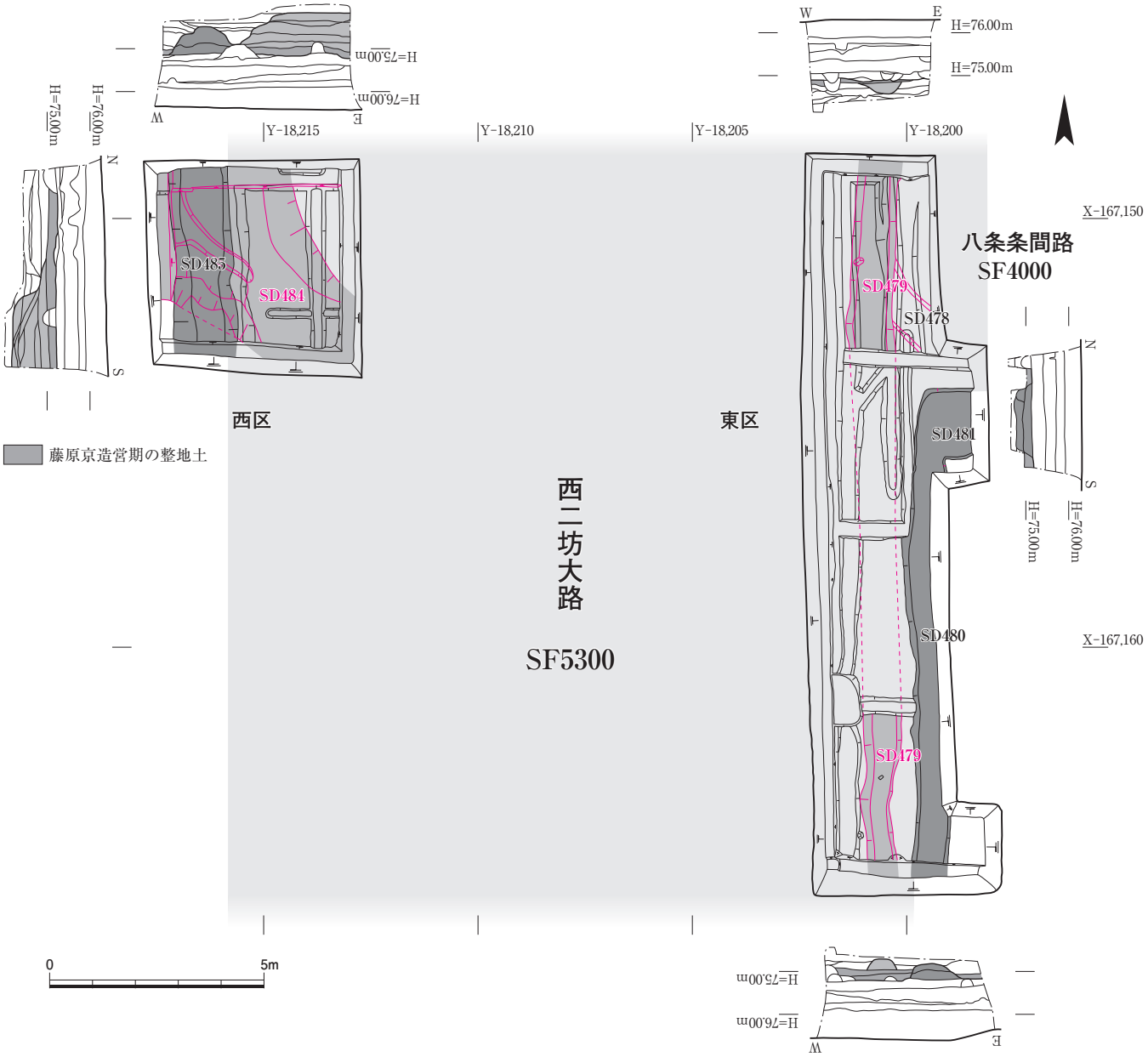

図87　第185-7次調査区遺構図　1：150

後述するように、SD485の下層には先行する斜行溝SD484がある。SD485の東肩のうち、SD484の埋土を掘り込んだ部分には、粘土質の土が貼り付けられており、護岸の可能性がある。西肩については、同様の工法の有無は確認できなかった。

八条条間路SF4000　東区で南側溝SD481を検出した。北側溝は調査区外にあたり、今回の調査では検出できていない。南側溝SD481の北肩から調査区北端までの5.3mを検出した。

八条条間路南側溝SD481は、東区中央付近の東側で検出した。西端で西二坊大路東側溝SD480と逆L字状に接続する。調査区東端で幅1.7m、深さ0.4mを測る。SD480が北へ排水していることと、調査区東側に飛鳥川が流れることを考慮すれば、SD481は東へ排水し、最終的に飛鳥川へ注いでいた可能性がある。なお、SD480とSD481の交点では、底面の標高が74.6mであり、SD481東端で測る底面標高74.7mと比較するとやや深い。これは接続部付近が流水等により、一層の浸食を受けたためと考えられる。

７世紀後半の遺構

藤原京造営期の整地土下層で検出した遺構である。

下層南北溝SD479　東区中央を縦断する南北溝。東区北端と南端で整地土を除去して平面的に確認し、それ以外は断割調査により土層断面で確認した。幅0.7～1.0m、深さは0.3mである。底面の標高は南端で74.7m、北端で74.6mであり、北流したものとみられる。西二坊大路東側溝SD480の西側に位置し、逆L字状に曲がることなく調査区を南北に貫通する。SD480とSD479の溝心々距離は1.2m。また、北端部西側では整地をおこなった後にこの溝を設けたものとみられる。

図88　西二坊大路東側溝SD480と八条条間路南側溝SD481、下層南北溝SD479（東区、北西から）

図89　西二坊大路西側溝SD485（西区、北から）

下層斜行溝SD484　西区を南東から北西へ横断する斜行溝。幅2.7～3.8m、深さ0.7～0.8mを測る。底面の標高は南端で74.2m、北端で73.9mであり、北流するものとみられる。この斜行溝は、北西に位置する本薬師寺第２次調査（『藤原概報 14』）で検出されたSD201Aにつながる可能性が極めて高い。埋土は上から褐色粘質土（厚さ0.2m）、黒褐色粘質土（厚さ0.3m）、黒褐色粘土と粗砂の混成層（厚さ0.2m）である。褐色粘質土と黒褐色粘質土は埋立土、黒褐色粘土と粗砂の混成層は機能時の堆積と考えられる。SD484は東区では、土層観察の深掘トレンチでも検出されなかったため、西区と東区の間を斜行し、東区のさらに南側に抜けるものとみられる。

７世紀以前の遺構

斜行溝SD478　東区北側の地山直上で検出した斜行溝。幅0.9～1.0m、深さ0.1～0.2mを測る。重複関係からSD479よりも古い。出土遺物はごく少量ではあるが、２～３世紀とみられるもののみである。

３　出土遺物

土　器　整理用木箱で７箱分が出土した。弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器などがあり、２～３世紀のものから、７世紀から藤原京期まで、平安時代のものを主に含む。細片が多い。ここでは、７世紀から藤原京期までの遺構から出土したものを報告する。

西二坊大路西側溝SD485出土土器（図90-6～8）　土師器には杯Ｃ、杯Ｇ、杯Ｈ、甕などが、須恵器には杯Ａないし椀Ａ、杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯Ｇ蓋、平瓶、甕などがある。８は須恵器杯Aないし椀Ａ。底部のみの小片だが、底部外面を丁寧なロクロケズリで平滑に調整する。７は須恵器杯Ｈ。底部外面はヘラキリ不調整。口縁部外面にX字状のヘラ記号。底部外面にも直線状のヘラ記号がみられる。６は須恵器杯G蓋。外面は降灰が著しい。

これらの土器のうち、８は飛鳥Ⅲ～Ⅴ、７はその法量から飛鳥Ⅱに位置づけられる。また、西二坊大路東側溝SD480出土土器は西側溝SD485とほぼ同じ内容だが、SD485に比べて少量かつ細片が多い。

下層斜行溝SD484出土土器（図90-1～5）　土師器には杯Ｃ、杯Ｈ、杯Ｇ、高杯Ｃ、鉢、甕などが、須恵器には杯Ｈ、杯Ｈ蓋、杯Ｇ蓋、鉢Ｆ、平瓶、壺、甕などがある。４は土師器杯Ｃ。口径10.6㎝、残存高3.1㎝。口縁部上半はヨコナデ調整、下半は不調整。内面に放射暗文を施す。３は須恵器杯Ｈ。口縁部が短く退化する。２は須恵器杯Ｈ蓋。頂部はヘラキリ不調整。Ｘ字状のヘラ記号が頂部外面に刻される。１は須恵器杯Ｇ蓋。外面の降灰が顕著である。５は須恵器壺。胴部下端から底部をロクロケズリ、それより上をロクロナデで調整する。内面に漆とみられる付着物が確認できる。

これらの土器は須恵器杯Ｈの法量と土師器杯Ｃの形態

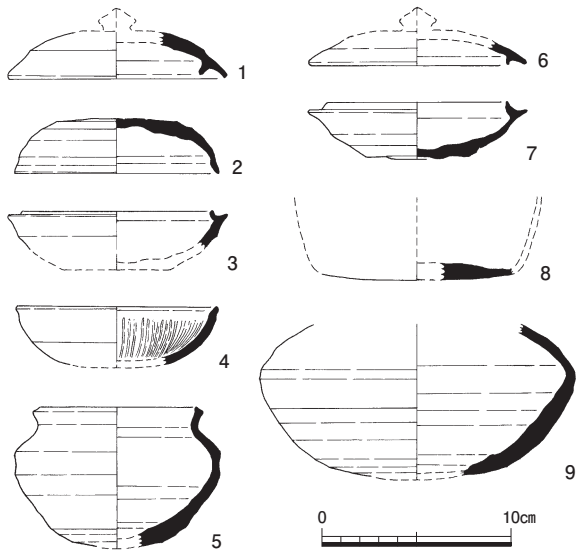

図90　第185-7次調査出土土器　1：4
（1～5：SD484、6～8：SD485、9：SD479）

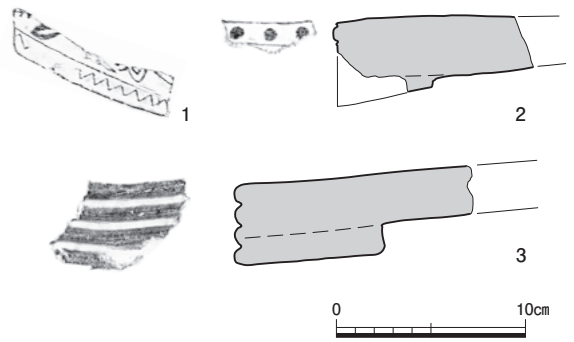

図91　第185-7次調査出土瓦類　1：4

表21　第185-7次調査条坊関連遺構溝心座標一覧

遺　構		X	Y
西二坊大路東側溝	SD480	－167,155.73	－18,199.48
西二坊大路西側溝	SD485	－167,153.20	－18,216.35
八条条間路南側溝	SD481	－167,154.72	－18,198.45
下層南北溝	SD479	－167,148.65	－18,200.63

から、飛鳥Ⅱに位置づけられる。

下層南北溝SD479出土土器（図90-9）　土師器、須恵器ともに細片が多く、器種が特定できるものは少ない。9は平瓶。扁球状をなさず、肩部がやや張る器形をなす。この器形は、飛鳥池遺跡SK70出土例（『年報 1999-Ⅱ』）や藤原宮SD1901A出土例（『藤原概報 8』）にみられるような、7世紀後半に普遍化する器形である。　**（大澤正吾）**

瓦　類　古代の瓦類としては、軒平瓦2型式以上3点、丸瓦80点（6.9kg）、平瓦176点（12.0kg）、面戸瓦2点、熨斗瓦5点、隅切平瓦1点が出土した。

図91の1は6647Ccで西区の平安時代遺物包含層から出土。精良な胎土で、本薬師寺創建時の瓦と同様、牧代瓦窯産とみられる。2は型式不明だが西二坊大路東側溝SD480から出土。平瓦凸面広端付近に斜行する刻みを入れ、顎を接合する。1と同様の胎土をもち牧代瓦窯産とみられる。3は四重弧文で、採集資料であるが参考に掲げる。

このほか熨斗瓦と隅切平瓦はいずれも胎土から牧代瓦窯産とみられ、すべて本薬師寺側にあたる西区で出土している。　**（山本　亮）**

木製品ほか　西二坊大路西側溝SD485より角材、燃えさしが、下層斜行溝SD484より尖端棒、板材、削片、燃えさし、ヒョウタンが出土した。　**（諫早直人）**

動物遺存体　下層斜行溝SD484埋立土よりウシもしくはウマの歯が出土したほか、重機掘削中に高瀬貝（サラサバテイ）の貝釦製作残滓が出土した。　**（山﨑　健）**

4　まとめ

本調査では、西二坊大路とその両側溝および八条条間路とその南側溝を検出した。西二坊大路については、単次調査で確実な両側溝を検出した初めての調査である。各条坊側溝心の座標を表21にあげる。

西二坊大路では、西側溝は八条条間路上を北流するのに対し、東側溝は八条条間路南側溝と逆L字状に接続することがあきらかになった。藤原京は、その地形が東南から西北に向かって下がるため、南北の大路や坊間路の東側溝は路面を北に貫通するのが通有である。西二坊大路東側溝と八条条間路が逆L字状に接続する要因としては、前述のように、本調査地の東を流れる飛鳥川への排水が可能性としてあげられる。

また、西二坊大路両側溝の下層で、先行する溝の状況が明らかになった。東側溝の下層では、南北溝SD479を検出した。この溝が東側溝に先行して掘削された条坊遺構か否かについては慎重な判断が求められるが、SD479が正方位にのり、かつ出土遺物が7世紀後半頃のものであること、また藤原宮や本薬師寺の下層で先行する条坊遺構が検出されていることから、SD479を先行西二坊大路東側溝と考えておきたい。

一方、対応する西側溝の下層には、斜行溝SD484が検出され、先行条坊の側溝とみなしうるような南北溝は検出されなかった。

調査区の都合上、西区では西側溝の西側を充分に調査することができず、そこでの遺構の状況は課題として残った。また、東区と西区に分断して調査区を設定せざるを得ず、両調査区の厳密な層位の対応関係を明確には把握しえなかった。SD479の性格を含めて調査事例の蓄積を待ってあらためて検討を加えたい。

以上、小規模な調査ではあったが、各条坊側溝とその下層遺構を検出したことにより、藤原京およびその造営過程を考える上で新たな材料を得ることができた。**（大澤）**